

第4室

(5) 9:30～10:00 (6) 10:10～10:40
(7) 10:50～11:20 (8) 11:30～12:00

第4室 (5)

SNS X

英語イマージョンと探究型学習（国際バカロレア・PYP）を統合した小学校教育

廣瀬 浩二（東京農業大学）・土谷 浩司（学校法人聖隷学園 聖隷クリストファー小学校）

静岡県浜松市にある聖隷学園は、2020年4月に聖隷クリストファー小学校（Seirei Christopher Elementary School, SCES）を開校した。開校時の学年及びクラス編成は1年生60名（2クラス）、3年生30名（1クラス）、5年生30名（1クラス）であった。SCESは、学校教育法第1条に規定する小学校であり、そのカリキュラムは「学校教育法第4章小学校」に従い、「学校教育法施行規則第4章小学校第2節教育課程」が示すカリキュラム編成及び授業時数を満たした一条校である。また、SCESの特徴は、英語イマージョン教育と探究型学習を統合することによって、日々変化を遂げる国際社会の中で活躍できる能力をもった児童が育つよう、魅力ある学校作りを心がけている点である。SCESの英語イマージョン教育で実施しているカリキュラムはtransitional language modelが基本となっている。つまり、1年生2年生では日本人教員と英語母語話者教員が共同して、児童が英語での体験型活動を通して英語を楽しむことや、英語の指示に慣れるなど英語を学ぶための土台作りと自ら学ぶ姿勢を身につけさせることを重視している。3年生4年生では、算数や理科などの教科で英語のリーディングやライティングも取り入れている。5年生6年生では、リスニング・リーディング・スピーキング・ライティングのスキルを生かしながら教科や教科等横断型の探究の時間に英語で指導を行っている。現在は、国際バカロレア（International Baccalaureate, IB）から英語イマージョンを取り入れた初等教育プログラム（Primary Years Programme, PYP）の認定を受けることを目標としたカリキュラム編成を行い、教育を行っている。

第4室 (6)

Cyclic Modelを援用した反転学習の実践とその効果

－生徒のモチベーションが途切れない授業デザインを目指して

石田 正寿（三重県立川越高等学校）

文部科学省の基本的な見解として、「主体的に学習に取り組む態度」は「学びに向かう力・人間性等」の中に含まれ、「学習に関する自己調整を行いながら、粘り強く知識・技能を獲得したり思考・判断・表現しようとしているかどうかという、意思的な側面」を捉えて評価し、育成していくものとされている。つまり、学習における自己調整の実行と学びに向かう意思を育てることが肝要かと思われる。そこで、それらを意図されたCyclic Model（竹内，2007）のデザインを

援用し、学習用ビデオを授業前に提示した反転学習を実施した。今回の発表では、その詳細と生徒の自己効力感、学習時の不安感、持続性、目標の明確さとともに、成績の推移を報告したい。

第4室(7)

SNS X

新検定教科書を用いた SDGs テーマの英語授業

—「持続可能な社会の創り手」育成を目指して

山本 孝次（愛知県立刈谷北高等学校）・竹内 愛子（名古屋市立緑高等学校）

2022年度から高校でも施行された新学習指導要領では、持続可能な社会の創り手育成が教育における大きな目標であると記している。この持続可能な社会の創り手育成をどのように行っていけばよいのだろうか。本発表では、持続可能な社会の創り手を地球規模課題の解決に自ら取り組んでいくことのできる人物と定義し、新検定教科書の SDGs をトピックにした課を用いた Soft CLIL 型の英語授業をその育成の一助となるものとして提案する。

本発表で紹介するのは、「持続可能な社会の創り手」育成を目指した英語授業である。新学習指導要領が示す育成すべき資質・能力の三つの柱といえば、「知識・技能」、「思考力・判断力・表現力」、「学びに向かう力・人間性」であるが、この中で人間性の涵養に主眼をおいた実践は少ない。しかし、発表者らが目指すのは人間中心の言語教育であり、その目標には社会に建設的に参加し貢献しようとする意欲・態度の育成や地球市民的視野の育成が含まれている。それを踏まえて、本発表では「持続可能な社会の創り手」を、SDGs で示されているような地球規模課題を自分事としてとらえ、考え、調べ、気づき、関係する人々と協力して、その解決に向けて取り組んでいくことができる人と定義する。

2022年度から高等学校で施行された新学習指導要領に則って検定された教科書では SDGs を明示的に扱うものが増えてきている。本発表で取り上げている Heartening English Communication I もそうした教科書の一つであり、三つの課で SDGs をトピックとしている。本発表で紹介する授業案は、そのうちの一つの課 Lesson 7 Behind the Price Tag を基にして作成したものである。関係する SDGs のゴールは、Goal 8 Decent Work and Economic Growth, 10 Reduced Inequalities, 12 Responsible Consumption and Production である。トピックとして地球市民的視野を持つ持続可能な社会の創り手育成に取り組むのに最適であるため、この課を選んだ。本授業案を参考にして、SDGs をトピックとした英語授業で行う持続可能な社会の創り手育成に関心を持っていただければ幸いである。

第4室(8)

SNS X

中学校の英語授業におけるリアクションペーパーの導入

—不登校特例校の事例

杉山 友希（西濃学園中学校）

本発表では、「不登校児童生徒を対象とする特別の教育課程を編成して教育を実施する学校（以

下 不登校特例校)」に指定されている中学校の英語授業におけるリアクションペーパー（以下 RP）の導入状況と、RP の記述内容の変容について報告する。RP とは、授業者が学習者に配布し、授業内容に対する感想や質問を記述させる紙媒体のツールである（小野田・篠ヶ谷，2014）。発表者は、不登校特例校の中学1年生および2年生の英語授業において、日本語で感想や意見・質問を記述する欄（以下 日本語記述欄）および英語を記述する欄（以下 英語記述欄）を設けた形式の RP を導入した。そして、1年分の RP の記述内容を記録し、記述内容の分類を行った。

日本語記述欄においては、1学期は授業に対する否定的な感想が散見されたが、2学期・3学期になると肯定的な感想や、授業内容に対する自分の意見、英語に関する質問、授業者へのコメント、クラスメイトに関する言及が増加した。これらのことから、河田（2012, 2014）で報告されたように、RP を通じて授業者と学習者の間に対話が生じ、クラスの中に親和的な雰囲気が生まれたと考えられる。一方、英語に苦手意識をもつ学習者の中には、年間を通じて、授業に関係のないコメントやイラストを記入した者もみられた。

英語記述欄においては、時間を経るごとに教科書に記載されている英文や英単語の産出が増加したが、自作英文の産出は減少した。この原因として、実践開始当初は自由に英語を記述させていたが、年度途中で英文の書き方に関する注意を行ったことが挙げられる。その結果、注意されない英文を書こうとして自作英文の産出が過度に抑制されてしまったと考えられる。しかしながら、学習者が英語を産出する機会を設けたことによって、授業中の様子や RP の日本語記述欄だけではみえない学習者の理解度を可視化することができたことは本実践の収穫であったといえる。